

大学の情報リテラシー教育の再検討

稲垣知宏(1)、隅谷孝洋(1)、永井克彦(2)、長登康(1)、中村純(1)

(1) 広島大学情報メディア教育研究センター(東広島市鏡山1-7-1
〒739-8521)

(2) 広島大学総合科学部(東広島市鏡山1-7-1 〒739-8521)

nakamura@riise.hiroshima-u.ac.jp

要旨

2006年度から入学してくる学生は、高校で教科「情報」を履修してくる。しかし、高校による履修内容の違いが大きいことが予想され、学生の予備知識の差は大きくなることが予想される。一方、現在でも入学してくる学生の8割以上は携帯でのメールの経験があるなど、社会の情報環境の変化も著しい。このような中で、これまでの情報リテラシー教育は今後どのように変わっていくべきか、これまでのアンケートによる調査等をもとに議論する

1) 始めに

広島大学では、教養的教育の一つとして情報科目を設置し、初年度にそれを履修することを全学生に要望している。情報科目に属する講義としては、情報活用概論、情報活用基礎、情報活用演習の三つがあり、それぞれが半年で完結するもので、情報活用概論は座学のみ、情報活用基礎は座学+実習、情報活用演習は実習のみという講義形態になっている。現在、夜間主コースを除いて、全ての学部で情報活用基礎もしくは情報活用演習を履修することになっており、全員が実習を受けられるようになっている。

教養的教育の一環として行われるこの情報科目では、一般の大学生にとって必要な情報リテラシー能力をつけることを最低限の目標としている。ここでいう情報リテラシー能力とは、コンピュータを使ってコミュニケーションができる能力、情報の収集・管理ができる能力、レポートを作成できる能力の三つを考えている。ここ数年、授業や学生生活で、これらのリテラシー能力が大学入学と同時に求められるようになり、今年度からは、情報活用基礎はすべて前期で履修できるようにした。また、次節のアンケート結果からも見られるように、入学時にすでにコンピュータ利用の経験のある学生、無い学生がいるために、履修登録時のアンケートからコンピュータに対する不安尺度を測定し、それによってクラス分けを行っている。

以下では、経年観察を行っている新入生に対するアンケートを分析し、今後の大学における情報リテラシー教育(一般情報処理教育)がどのような形のものになるべきか議論したい。

2) 新入生アンケート

新入生に行っているアンケートから本稿の目的に関連するものを紹介していく。高校で情報科目の授業があったか、あったときにはその授業を受けたかという質問の回答を見ると、年々増加はしているものの、まだ大部分の高校で情報の授業は行われていないようである。

高校に情報科目があったか				
年度	あった(%)	なかった(%)	わからない(%)	合計(人)
1997	18.8	79.2	2.0	2269
1998	19.0	79.5	1.5	2118
1999	21.1	76.3	2.6	2192
2000	21.3	76.0	2.7	2179
2001	22.0	74.6	3.4	1254
2002	23.5	73.6	2.9	2020

情報科目の授業を受けたか			
年度	受けた(%)	受けなかった(%)	合計(人)
1997	76.4	23.6	419
1998	75.5	24.5	396
1999	77.1	22.9	454
2000	75.9	24.1	461
2001	80.0	20.0	275
2002	80.2	19.8	470

高校に生徒が自由に使えるコンピュータがあったか				
年度	あった(%)	なかった(%)	わからない(%)	合計(人)
1997	14.4	73.8	11.8	2264
1998	16.7	72.7	10.7	2112
1999	18.7	69.6	11.7	2177
2000	25.4	66.2	8.4	2170
2001	32.1	56.7	11.2	1251
2002	39.8	51.0	9.2	2013

一方、高校で自由に使えるコンピュータがあったかという設問の解答を見ると、無い高校は確実に減っており、2002年時点ではほぼ50%になっている。また、コンピュータを使ったことが無い学生は少しずつ減り、一割以下となっている。

社会の動向をはっきりと表しているのは、家におけるパソコンの普及率で、2002年時点では5割以上の学生があると答えている。また、大学での情報リテラシー教育でも考慮すべき大きな変化として、2002年時点で実質的にほぼ新生全員が携帯もしくはPHSを所有し

そのコンピュータを使っていたか				
年度	よく使っていた(%)	時々使っていた(%)	使っていなかった(%)	合計(人)
1997	2.9	34.2	62.9	383
1998	5.1	32.7	62.3	395
1999	7.7	41.2	51.1	452
2000	5.0	48.4	46.5	578
2001	7.9	49.9	42.3	407
2002	5.9	51.0	45.9	791

コンピュータを使ったことがあるか				
年度	よく使う(%)	使ったことある(%)	使ったことがない(%)	合計(人)
1997	6.5	77.2	16.3	2267
1998	8.3	77.4	14.3	2109
1999	11.8	77.4	10.8	2191
2000	14.8	75.3	9.9	2175
2001	17.8	71.9	10.3	1253
2002	18.0	74.3	7.6	2918

家にコンピュータがあるか			
年度	ある(%)	ない(%)	合計(人)
1997	26.8	73.2	2247
1998	27.4	72.6	2102
1999	31.9	68.2	2176
2000	38.4	69.6	2168
2001	45.8	54.2	1247
2002	58.0	42.0	2016

携帯電話もしくはPHSを持っているか			
年度	持っている(%)	持っていない(%)	合計(人)
2002	97.5	2.5	2015

ているとじ事実がある。そして、大部分の学生が携帯でのメールを、大学の情報リテラシー授業でならうメールより以前から利用している。

3) これからの情報リテラシー教育

アンケートの経年調査結果から、高校で教科情報が必修であった学生が入学してくる2006年度から新入生の動向が急激に変化するとは思えないが、家庭でのコンピュータの普及は確実に進み、初歩的な利用は十分にマスターした学生の比率は高まっていくと思われる。一方、少数ではあるが、利用経験の無い学生も一定数はいることが予想される。このような状況で、学生一人一人の目的、ニーズ、能力に合わせた教育を目指して現在以下のような戦略を検討している。

リメディアル教育

多くの学生が、基礎的な情報リテラシー教育を入学までに身に付けてくるなかで、そのような教育環境に無かった学生にとっては、大きな学習上の障害となる。そのような学生のために、入学直後に、集中的にリメディアル教育の機会を提供する必要がある。

高度な座学

情報科学の基礎、ネットワークの仕組み、プレゼンテーション技法などのより高い授業を提供し、教室環境自身が、教員、学生が授業中にネットワークに繋がったコンピュータを理解を高めるために使用しながら学べるようなものになっていく必要がある。

メディア活用授業

メディア学概論、シナリオ作成、CG作成、ビデオ制作、発表といったカリキュラムによるメディアの高度な活用を学ぶことができる科目を希望する学生には提供する必要がある。

WBT教材の活用

多様な要求に答えるために、WBT(Web based training)型の活用も大きな課題になってくる。